



巻頭言

化学反応と企業経営

濱 逸夫 Itsuo HAMA

ライオン株式会社 代表取締役 社長執行役員 最高経営責任者



本寄稿の依頼を受け、何を書こうかと考えた瞬間に、こんなタイトルが浮かんで来た。以前から因果性を感じていたテーマである。

物質の多様性の起源は化学結合の組み換えにある。また組織の多様性の起源も、人や物事の結合の組み換えにある。そして化学結合の組み換えが化学反応であり、人や物事の結合の組み換えが、社長の仕事であり、企業経営の根幹を成す。こう考えると化学系出身の社長として、経営には化学反応以上の面白さを感じる。

この事業を活性化し、成長させるために、どんな触媒を使おうか？

この組織の仕事をスピードアップするために、どんなラジカルを放り込もうか？

この会社の競争力を強化するための新結合や連鎖反応をどうデザインするか？ 等好奇心と挑戦心は尽きない。想定を超える反応が進んだとき、企業は思わぬ飛躍を遂げる。業績が向上し、社員の意識が高まり、またそれが次なる仕事への好循環に繋がる。そんな夢のある実験を毎日のように考え、試行錯誤を繰り返しているのが社長の仕事である。

以前、分子生物学者である福岡伸一先生が書かれた“生物と無生物のあいだ”という本が話題になった。“生命とは動的平衡の流れであり、自己複製するシステムである”とか、“原子間の秩序（結合）は、守るために絶え間なく壊さなければならない”とか、生物学的には諸説があるようであるが、生物細胞間の連動メカニズムと組織マネジメントを重ね合わせ、大いに共感した覚えがある。

企業活動には、何かこのような化学や生物学に通ずる多くのものが存在するような気がする。考えてみれば、企業活動はすべて人間が創り出しているのだから、それは当たり前かもしれない。すべての多様性の源泉がここにあることを忘れてはいけない。

業績数字目標の達成や短中長期戦略の立案、コーポレートガバナンスの遵守、IR活動などに追まられる企業経営ではあるが、ふとした瞬間にこんなことを考え、面白がり、次々に新たな実験計画を立てるのも、永年の研究経験で培った技術屋出身の社長の探究心や粘り腰の真骨頂なのだろうか？ 常に最大の収率を実現する反応条件を追い求めている。

近い将来、この世界にデジタル革命が浸透し、AIやIoTが人間生活のすべてのセクターに介入する時代が到来する。そのとき、企業経営はどう変わるのか？ 最近そんなことを考えている。そんな時代では、質量保存の法則を大きく飛び越え、両者の因果性を覆す新たな結合の組み換えが実現するかもしれない？ 社長の腕の見せ所である。

© 2017 The Chemical Society of Japan